FOR PROFESSIONAL & AMATEUR BASSISTS ベース・マガジン 6月号

BASS MAGAZINE

Vol. 20

特別付録 シート・レコード

GEDDY LEE

マーカス・ミラー
ジョン・エントウイッスル
バーナード・エドワーズ
須藤満
加部正義

ベース・ラインも立派なメロディだ!
メロディアス・ベース・ワールド

ウイークポイントバスターズ
ミュート

The Bass Instruments
ハードウェアQ&A

ジャン・ジャック・バーネル
トニー・レヴィン
ジェフ・バーリン

Geddy Lee

R U S H

先頃、ニューアルバム「プレスト」をリリースし、春からはツアーを開始したRUSH
来日を望む声も高い昨今だが、今回はツアーでアメリカ西海岸を南下中のゲディをキャッチ
短い時間の中でのインタビューだったが、
曲作りについて、プレイについて、彼の考えを聞いてみた

Photo:William Hames　Interpretation:Kaz Kawazoe
Translation:Miki Nakayama　Special Thanks:Ryo Ishida

コスタ・メサでのステージは超満員。
迫力のライト・ショーと、5m以上のウサギも登場した。
演奏の難しさとは対照的に、
とてもリラックスして聴かせる
パフォーマンスという雰囲気。

大規模なアメリカ・ツアーを行なったRUSH。クオリティの高い演奏とショーアップされたステージ（『プレスト』のアルバム・ジャケットを思い出してほしい。あのとおりステージには大きなウサギのセットと、なんとバニー・ガールまで登場したそうだ）は豪華で素晴らしく、写真ではその熱気を伝えきれないのが残念だ。

ご存知のとおり、ライブではひとりで何役もこなすゲディ・リーだが、ツアーの途中のカリフォルニア、コスタ・メサのステージの終わった後の楽屋で、彼は疲れた顔も見せず、快よくBMのインタビューに応じてくれた。

今回のステージでは、キーボードのセットをシンプルにしたんだ。

●今回のツアーではどのような機材だったのですか？何か新しいものを取り入れましたか？

●いや、基本的にそんなに変えていない。機材は前回と同じものが多いよ。ただ、キーボードに関してだけはかなり変えたんだ。ステージでは、キーボードのセットアップをシンプルなものにしたんだよ。より多くのキーボード・パートをサンプリングできるように、新しいローランドのサンプラーをたくさん使っているんだ。だから以前よりとても合理的になっていて、ステージにあまり多くのキーボードを並べなくてもすんでいるんだ。今回のツアーでは、たくさんのキーボードに囲まれるのを避けて、何よりも使いやすさを第一に考えたんだよ。

●ライブでは曲をどのようにアレンジしているのですか？　特にアルバムでオーバーダビングしているシンセサイザーのパートはどのように処理しているのでしょうか？

●僕は足でベース・ペダルを踏んでシンセサイザーのパートをプレイするときもあるし、ベースを弾きながら、シーケンサーに打ち込んだシンセサイザーのパートを足元のペダルで操作するときもある。あるいは、ペダルごとにコードをプログラミングして、足でMIDIをコントロールするときもあるね。ライブでは手も足もすべて使ってやっているってわけだよ。アレックスがギターを弾かないときは、彼がキーボードのパートをプレイすることもあるよ。そうやって分担して処理してるんだ。

●ステージでインプロヴィゼーションはよく行ないますか？

●そんなにしないよ。1回のステージで2度くらいのものだね。つまり、2曲くらいをルーズにアレンジしてインプロヴァイスしやすくするんだ。でも、ほとんどの曲は普通にプレイしているよ。

●ライブではボーカルをこなし、ベース、フット・ペダル、キーボードを弾いているわけですが、トラブルもなくそれらの楽器をスムーズに弾きわけるコツは何でしょう？

●練習することだよ。

コード弾きを多用することがアルバムでやりたかったことのひとつなんだ。

●最新アルバム『プレスト』に、ルパート・ハインをプロデューサーとして起用した理由は？

●彼の作品はずっと気に入ってたんだ。だから1983年頃に彼と一緒にやろうと計画したことがあるんだ。でも、残念ながらそのときはスケジュールが合わなかったんだよ。それで、今回のアルバムにピーター・コリンズが参加できないとわかったときに、まっさきに頭に浮かんできたのがルパートだったんだ。それで今回は一緒にできたってわけだよ。

●『プレスト』では、かなりベース・プレイに比重を置いているような印象を受けましたが……。

●うん。今作では、ここ数年間で作ったアルバムよりはキーボードを少なめにしてあるんだよ。ギターの音を重視して、キーボードをあまり多用しないという形を、また考えるようになったんでね。エレクトリックなサウンドよりも、もっと人間的な音のものにしたかったんだ。

●それでベースのフィル・イン的なフレーズやソロ・パートが増えたのですね。

●そう、キーボードを使わなくなったぶん、ベース・プレイを入れるスペースが増えたからね。これはやっていて、とても楽しかったよ。

●レコーディングで使用したベースは？

●ウォルだよ。今回の前に作った2枚のアルバムでも使ってたんだ。

●5弦ベースは使いましたか？

●いや、使わなかった。

●シンセ・ベースで弾いているパートを、5弦ベースで弾くという考えはありませんか？

●うん、5弦でやろうとは思わないよ。たぶんその考えは可能なんだろうけど、僕はシンセでやるほうが好きなんだ。

●曲の中で、ちょっと音色が変わっているところがありますよね。たとえば『Chain Lighting』のイントロと歌中のリフなどですが……あれはピッキングをいろいろ変えたりしているのですか？

●フィンガー・プラックをするときはあるね。ほら、クラシック・ギターのプレイヤーがやるような奏法だよ。チョッパーのときのプリングのように、指で弦をはじくようにして音を出すんだ。それ以外は普通の弾き方をしているよ。

●ピックは使わないのですか？

●うん。使わない。

●右手のタッチが非常に強いと思うのですが、何かトレーニングなどしているのですか？

●いや、まったくトレーニングはしていない。自然にそうなったんだと思うよ。

●『Chain Lighting』や『The Pass』など、コード弾きをしているプレイが聴けますね。これはあなたの重要な個性のひとつとも思えるのですが……。

●うん、そうだね。前の2枚のアルバムのほうが、もっとコード弾きをしてたんだけどね。この弾き方はベース・プレイヤーにとっては弾き慣れないものだろうし、あまりできる人もいないだろうね。僕は実験的にやってきたんだ。だけど、ときどき曲にマッチしないこともあるね。でも曲によく合っているときは、ベースの音にリズム・ギターの効果もプラスされて、とても役に立つんだよ。確かに僕のスタイルの一部になってると思うよ。

●『Show Don't Tell』はリフから作った曲じゃないですか？

●そうそう、リフから作ったんだ。ファンキーなリフを思いついたからね。

●今作では、テクニック的に何か新しい試みはありましたか？

●コード弾きを多用することが、このアルバムでやりたかったことのひとつだったんだ。そのおかげで、いろいろな意味でたくさんの経験ができたし、さまざまな練習をすることができたよ。それにさっきも言ったけど、キーボードを少なくしたからベースを忙しく弾かなきゃならなかった。それで1分間に弾きこなせる音数が以前より多くなったのは確かだね。だけど、速くて細かいフレーズをフィル・インしていくのは本当に難しいよ。十分にうまくできてるか、自分でもわからないけどね。

●RUSHの曲は、コード進行が独特なところに特徴があると思いますが、曲を書くときにもそういうところは意識していますか？

●何年か前は、ほかの人たちとは違ったやり方で曲を作ろうと努力していたこともあったね。でも最近は、もっと自然に曲を書くようになったよ。だから僕の意識していないところで、RUSH独特のスタイルが自然にできあがってきたんだと思うよ。

●1990年代初めてのアルバムということで、何か新年代に向けての意味をもたせるというようなことはありましたか？

●それが、このアルバムを作ったのは1989年だったんだよ（笑）。だから、そういったことは考えなかった。ただ、レコードをまた作れるっていうことがうれしかったね。

今一番気に入っているのはウォル。フェンダーは中間的な存在だね

●これまで、リッケンバッカー、スタインバーガー、ウォルなどいくつかのベースを使ってこられたわけですが、それぞれのベースについてどんな感想をもっていますか？

●どのベースも素晴らしいものだと思うよ。僕がベースを変えた理由というのは、僕自身が変化したからだね。どのベースにも、ほかのベースに負けない素晴らしいところがあるし、今でもときどきリッケンバッカーがいいなって思うこともある。でも、今現在、僕が好む音はウォルなんだ。きっと僕のスタイルに合ったベースなんだね。

●ウォル以外に使っているベースはありますか？

●それ以外に使うベースは、フェンダーのジャズ・ベースとプレシジョン・ベースだね。1974年に初めてツアーをして……そのときからアメリカでプレイし始めたんだけど……その頃はフェンダーのプレシジョンをよく使ってたんだ。カスタム・メイドでジャズ・ベースのピックアップを付けたベースも持ってた。この30年間、フェンダーのベースは断続的に使い続けているね。『ムービング・ピクチャーズ』もそうだし、そのほかたくさんのアルバムでもフェンダーのジャズ・ベースを使っているよ。すべてのベースの中で、フェンダーは中間的な存在として使ってるんだ。

●理想のベースとは、どんなものですか？

●今のところは、僕のウォルがそうだね。そのうち、もっと良いのができるかもしれないけど。ウォルはここ数年間に使ったベースの中で一番いい音がすると思うよ。僕にとって完璧なベースっていうのは、ウォルと同じ音がして、スタインバーガーと同じくらい小型のものだね。それが完璧なコンビネーションだと思うよ。

●ニール・パートの書く詞については、どのような感想をもっていますか？

●ほとんどの歌詞は気に入ってるよ。だって僕は歌わなくちゃならないから、好きにならなくちゃね（笑）。そうじゃなければ歌えないだろう？

●今、興味をもっているベーシスト、アーティストはいますか？

●いつも好きなベーシストはジェフ・バーリンだよ。僕にとって、彼はエレクトリック・ベースのマスターなんだ。彼はジャズをよくプレイするけど、ロックだってできると思うよ。僕は彼が、全世界の中で……つまり地球上で一番うまいベーシストだと思うし、ヒーローなんだよ。

そのほかにも、いろいろな意味で好きなベーシストはいるけど。僕はメロディのセンスが良いことが、素晴らしいベーシストを作る要素だと思うんだ。もちろん、リズム・センスも大切だけどね。でも、曲の中で最適な音を選んで曲を作りあげるタイプのベーシストのほうが、速くプレイできるベーシストより好きなんだよ、僕は。

●では最後に、日本公演は長いこと実現していませんが、可能性はありますか？　RUSHのステージを観られる日を、首を長くして待っているファンがたくさんいるのですが……。

●残念だけど、今ははっきりしたことは言えないね。毎年ツアーも短くなってきているし、日本公演は実現するかどうかわからない。でも、いつでも可能性は残っているものだからね。

●ローリング・ストーンズの来日が実現したように？

●うん。そのとおりだよ。